慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ペルシヤ文學史考, 荒木茂著
Sub Title	
Author	飯田, 忠純(Iida, Tadazumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.2, No.1 (1922. 11) ,p.151- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19221100-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

早く本書の續編の世に現はれんことを期待して止まぬものである

博物館陳列品圖鑑　第三輯（朝鮮總督府編）

左の精巧なる寫眞版十二葉を收む

○博山爐（平安南道大同江面石巖里古墳出土、推定漢代）
○四神鏡（同貞柏里古墳出土、推定漢代）
○奩（同石巖里古墳出土、推定漢代）
○騎馬土偶（大谷光瑞氏新疆發掘品）
○銅冠（慶尙南道梁山面古墳出土、三國時代）
○壁畫（忠淸南道扶余面古墳、土人百濟王陵と云へるものの天井に描けるもの）
○陶瓮棺及坩（全羅南道羅州郡潘南面の古墳出土、三國時代）
○焜爐（平安南道雲山郡東新面古墳出土、鐵製高句麗時代）
○葛項寺東塔（元寶十七年の塔記あり、吏讀と稱せる朝鮮假字を使用せる最初のもの）
○彌勒菩薩像（開元七年造像記あり）
○釋迦如來（高麗初期）
○釜（高麗期）　（以上三項松本信廣）

ペルシヤ文學史考（荒木茂著　岩波書店發行）

先には世界聖典全集の一部として「アヴェスタ」の邦譯二卷が公にせられ此度は荒木茂氏の著「ペルシヤ文學史考」の公刊により邦語の成書を以てペルシヤの事を讀むことが出來るに至つたといふことは欣快之に過ぎるものが尠い。

荒木氏は夙に比較言語學に興味を有たれインド・ユーロピアン語系に屬する主なる歐米諸國語殊に其語系の中にて尤も古き言語として知らるゝサンスクリット語の研鑽に從事されそれと同時に其の姉妹語たるペルシヤ語の修得に勉めらるゝ事前後約十年に及ばれてゐる。そしてコロンビヤ大學に於ける古代波斯研究の泰斗A・V・ジャク・ソン博士並に十數ヶ國の言語に通ずるペルシヤ人ヨハンナン博士に師事されてゐた。『大凡、世界歷史を繙くものは、古來屢々ペルシヤの國體が、外患の影響を蒙つたことを容易に觀察し得るばかりでなくペルシヤ人の思想上に起つた種々なる變化をも知ることが出來るであらうが彼等の國語も亦、殆ど他に比類がない程、著しく變裝してゐるのである』（三頁）。本書は『我國に於けるペルシヤ研究を盛ならしめんことを願ひ、時代の變遷に伴ひ種々に變裝せるペルシヤ語の遺跡の大略を茲に述べて他日の部分的研究の準備とする考』（自序）で『時年コロンビヤ大學に於て起草し爾來數回の改訂を經て此度出版する』（凡例）こととなつたものである。四六版本文二七六頁、外に年代表一一頁附錄參考書類目錄一〇頁合計約三百頁の手頃のものである。

本書の內容は一、緒論二、アカメニアン朝の遺跡、三、アヴエスタン文學の沿革、四、パーラヴイー文學の內容、五、近世ペルシヤ語の諸作の五章に分ち附圖十九種を各所に配置してある。此の編目については特に著者が用意を加へたので、著者の師ジヤク

ソン博士が第一にゾロアスタール教々典「アヴエスタ」を說き次にアカメニアン朝の楔形文字に就て述べ第三に中世期に屬するパーラヴイー文學を說明するのが、時代に伴ふ順序であると敎示されたの對して著者は著者自身の見識に基き、第一にアカメニアン朝の遺跡の年代は明確であつて何れの學者に反對する餘地がないが現今まで傳へられてゐる「アヴエスタ」の寫本はその內容の一部分のみが古きに屬して居つて現存する形になつたのはアカメニアン朝以後であることと第二にアヴエスタン文學とパーラヴイー文學とは密接なる關係を有し二者連續して說かるべき性質のものであることとの二つの理由から、敢てジヤクソン博士に從はず先づアカメニアン朝の遺跡について述べ然る後にアヴエスタン、パーラヴイー兩文學を引續き說明するの順序を採つたのである。

先づ緖論（一―三〇）に於てはペルシア語はインド・ユーロピアン語系中のインド・イラニアン系統に屬しサンスクリト語の姉妹語であると說明し、次にペルシヤ人と呼ばれ國土をペルシヤと稱せらるゝやうになつた由來をファールス（fars）卽ち古のパールサ（Parsa）なる地名に基因すると爲し次にペルシアの歷史をその言語との關係に就て大略を述べてゐる。『全體から見るとペルシヤ語學史上に二つの大なる間隙（ギヤップ）を認める。第一はアレキサンダール大王がペルシヤの平和を攪亂して以來、サセーニアン朝の勃興に至る五世紀の間の一大間隙であり、第二はサセーニアン朝が滅びてペルシヤ全土がムハメツド敎徒の勢力範圍に歸するまで二三世紀間の間隙である。第一の間隙は、單に長時期であつたといふ計で唯表面的の動搖に過ぎず、異族の根跡は少しも殘らなかつたが第二の間隙は短期であつたにも拘らず、深刻に且つ永遠的な印象をペルシヤ人の腦裡に銘じたのである。之れは勿論、政治的の影響ではなくして、人心の深奧にまで達した、宗敎的感化に外ならないのである』（一七―一八）。『敎典「クラーン」（Quran）の語、乃ちアラビア語がペルシヤ語に代つて堅く根據を據えるやうになりペルシヤ語もアラビア文字を以て書かれ內的にもアラビア語の影響を多く受けるやうになつて來た。かくて純粹なるペルシヤ語の著作は漸次滅じアラビア語を以て著されたる書籍のみが增加するやうになつたのである』（一六―一七）。『尙ほ此等のペルシヤ語の遺跡を趣味の上から見ると（一）アカメニアン朝の遺跡は言語學上並に歷史上より最も興味深く、（二）アヴエスタン、パーラヴイー二語の遺跡は宗敎及び神話の研究に資し、（三）近代ペルシヤ語に到つて、漸く文藝的趣味の作品が多くなつたやうである』（一九）と。次に著者はペルシヤ語研究の沿革を述べてゐるが、歐洲の學者が如何にして此複雜なるペルシヤ語の研究を進めたかその道程を調べて見るに『最も吾人の興味を索く點は、先づ第一に、該研究が近代のペルシヤ文學に對する興味より次第に溯つて中世期並に古代の言語研鑽に及んで居ること、第二に、亞剌比亞人文の研究が、引いて同じ文字を用ゆる近世ペルシヤ語の作品研究に端緖を與へたことである』（一九―二〇）といつてゐる。而して『斯の如くにして進んだペルシヤ語各期の研究中、最も不完全なるは、中世期のペルシヤ語、パーラヴイーの遺作研究であるが、次で問題の多いのはアヴエスタン文學である。流石に資料尠き楔形文字の遺跡研究は、今日までに發見せられたる遺跡全部に亘りて殆ど

完成とも稱し得る域に達してゐるのである。近世ペルシヤ語の諸作に至りては語根をインド・イラニアン系統に置くものと、セシアツク系統に屬する語との混同こそあれ、古代中世期の言語と異なり、亞剌比亞語の研究に連れて文法辭書も完成し、容易に了解し得るやうになつてゐるのである』(二九)。

次に「アカメニアン朝の遺跡」(三一―七四)に於ては、アカメニアン朝時代の言語を最も正確に遺してゐる碑文につき、其の解讀するに至つた徑路と此等に銘刻されてゐる碑文の內容とに關して述べてゐる。アカメニアン朝は紀元前五五〇年ペルシヤの南部に起つたものでダリアスの時代は國勢頂上に達した。『ダリアス以下諸王が彼等の霸業を後世に傳へんため自ら命じて處々に彫刻せしめたる楔形文字の碑文には最も信ずべき事實を傳へてゐる』(三五)と著者はいふが、とにかく此の『最古に屬するアカメニアン時代の碑文は今日尙その大部分が鮮明で比較的完全に保存されてあるけれども後世に彫刻されたる碑文に限つて痛く磨滅され、不明瞭となり、却て解讀に困難であるといはれてゐるが之れは勿論各時代の技巧の如何に大なる關係もあり又一面文字の形に依るのである。乃ちアカメニアン時代の楔形文字の形は、直線的であつて曲線多き時代の文字に比較すれば雨水の影響も左程になく永き年月を經る間には其の腐蝕する程度に著しい差異を生じて』(三四―三五)ゐるので『此の楔形文字を以て書き表はされたる言語は、インド・ユーロピアンの系統のイラニアン族に屬するものであるこの等アカメニアン朝の文字を以て綴られたるペルシヤ語の文法は時代の變遷に伴ふて變化した形を除いては殆ど規則正しくアヴエスタン文學中最も古き部分であるガーサー語に現はるる文法に類似してゐるのである』(三六―三七)。『アカメニアン時代の遺跡を見るに、この主なるものは今日まで傳へられて居る範圍では同朝の全盛時代ダリアス王の遺物である。而して此等の銘及び碑文は現代の或る一派の人の目には、文學的作品として餘りに價値のないもののやうに映ずるかも知れない。けれども此等の碑文には素朴で然かも尊嚴なる語を用ひ簡明にして然かも誌さんと望んだことを洩さず、謙讓にして誇らず、警めんと欲したところを憚らず戒めて、良くアカメニアン朝の昔を語つて居るのみならず、ダリアス王以下、二三王の性格を描き、種々なる暗示を與えるものは、他に比類が尠いと思ふのである。又、ペルシヤ最古の言語を其儘に今日に傳へて來た唯一の記錄として最も忘るべからざるものである』(七二―七四)と。

次に「アヴエスタン文學の沿革」(七五―一二七)に於ては、著者は『此の文學が吾人に敎ふる第一の事は、ゾロアスタール敎そのものである。而してその敎典「アヴエスタ」の中に往時より現今まで此敎を遵奉して來た信者の情意を描き、彼等の從つた諸々の規定を誌してゐるのである。更に言語學の見地より此アヴエスタン語がサンスクリツト語と姉妹の關係を有する事を敎へ又、ペルシヤの神話を語り、インド、イラニアン比較神話の研究に唯一の資料となつてゐる』(一二六―一二七)といふ趣旨で前後縱橫に論述してゐる。言語學上の見地から。アヴエスタン文學の言語はサンスクリツト語にも類似してゐるが又アカメニアン期の楔形文字の言語にも似てゐる。更にその言語を綿密に研究して見ると三つの

時代に區別することが出來る。それ等の時代を異にする三樣の變化は「ガーサー」「ヤスナハプタンハイティ」及び其他の大部分の章に現はれてゐるので『此の變化の徑路は言語學の一定の法則に準據して居る』（七九）。但し『現今保存されてゐるアヴエスタン文學を傳へてゐる文字はセミテイツク語系の影響を受けてゐる事が明かであり又現存してゐる「アヴエスタ」は昔時の「アヴエスタ」原本の一小部分に過ぎないことも亦確かなのである』（八一）。更にその內容についていへば「ヤスナ」「ヴイスパラッド」「ヴエンデイダート」「ヤシツ」であるが外に斷片的な十品もある。「ヤスナ」は禮拜上の祈禱文、儀式及び供物等に關して書かれ、「ヴイスパラッド」も「ヤスナ」と同性質のもので諸々の「精」に捧げた祈文である。「ヴエンデイダト」は總ての「惡魔に對する律」で古ペルシヤの法源を爲すものである。「ヤシツ」も亦た祈禱文と頌讃とを集めたものである。著者荒木氏は此等の全部に亘り、其の形式のみならず、內容を詳しく調べてゐる（九四頁以下）。「ヴエンデイダート」は『アヴエスタン文學の他の部分の如く、至つて單調な書き方であるが、特に「ヴエンデイダード」には文體の不變なる章多く、讀經に容易く、又た暗誦するに便なるやうに書かれてある。是が卽ち最初の二十一篇中最も完全に傳へられて來た部となつた所以ではあるまいか。更に他方面からその內容を窺ふと、ペルシヤに於ける古來の風俗習慣を種々の方面より示して居つて、「ヤスナ」に比して遙かに興味が深い』（一一五—一一六）。而して此の「ヴエンデイダート」は神話に富んでゐて未だ不可解な點も多いのであるが、往時の刑法、民法を研究するには唯一の資料となるのである。『「ヤシツ」を大別すればゾロアスタール教の教義を說明するものと、ペルシヤの神話を物語るものと、ペルシヤの神史を誌して居るものとの三種に分類することが出來る。全體から見てガーサー時代よりも新しい作のやうである。アヴエスタン文學の他の部に比して、文雅に富み、文學的見地から最も趣味の多い部であるといつても過言でないと思ふ。只だ、アヴエスタン文學全部に共通なる缺點（幾多の不可解なる文字、單調なる文體等）が、此部にも多いので雅致を削いで居ることが多いのは遺憾である』（一一二）と言つてゐる。

次に「パーラヴイー文學の內容」（一二九—一六〇）に於て、『アカメニアン時代の碑文解讀の一條の光明を與へた言語はペルシヤ中世期に通用されたパーラヴイー語であり、又、アヴエスタン文學の研究に最も緊要なるは、そのパーラヴイー語にて書かれてある多くの遺著である』（一三一）ところから、著者は其等の作の內容の概略を述べてゐる。パーラヴイー文學には、第一にゾロアスタール教の教典「アヴエスタ」をパーラヴイー語にて書き表はし、當時不明と考へられた處にパーラヴイー語の註釋が加へられたる作、第二に直接「アヴエスタ」に關係はないけれども、ゾロアスタール教の諸問題につき述べられたるもの、及び、第三に宗教に關係なき諸作品の三種があると爲し此等につき可なりに詳細に勘考してゐる。『イラン高原には、古來內憂外患が引き續いたため、アカメニアン朝の碑文等を除く他の古代の作品は、總てその原本を失つたのである。されば、現存するアヴエスタン文學の如きも、久しく口碑に傳へられ、漸く、サセーニアン朝に到りて蒐集されたの

で、不完全なる斷片であることが解つたが、中世期以來のパーラヴィー語の作品も亦、大半はその原本を失ひ、各種の寫本が傳へられるやうになつたのである。勿論、最近に到るまで、彼等の間には印刷が實施されなかつた。從つて、それ等の寫本も一字々々手づから寫し、然かも、寫字手の多くは、その意味する處を了解せず、唯、生計を營む爲めのみ、寫字を職業として居つた者もあつたやうである故、寫本には、不完全不正確な多くの點を、免れなかつたのである。斯る不完全なる狀態にあるパーラヴィー語に通曉する學者も至つて稀で、唯、英國のウエストのみ、巍然として斯學研究に頭角を現はして居つたけれども、未だ、不可解に埋れて居る疑問な點が多くあるのである。されば今日まで傳へられて來たパーラヴィー語の諸作が、歐洲各國の言語に飜譯されて居るけれども、眞僞を混同しだものが、多く發見されて居るのも亦、止むを得ないことである。吾人が今後の發見と研究とに期待することも亦、蓋し尠くないのである』(一五九―一六〇)。

最後に「近世ペルシヤ語の諸作」(一六一―二七六)は、其の量に於て本書の約二分一を占め、回教徒勃興以後に於ける作品を時代の順序に從て能ふ限り內容をも吟味してゐる。そして其の主要なる資料をば、タマーリビーの著「ヤティーマトウッド・ダール」、ニザームアッサマールカアドの著「チヤハール・マカーラ」、イブンハッリカーンの著「ワフッヤートウル・アヤーン」、アウフキーの著「ルバーブル・アルバーブ」及びダウラトシヤーの「詩人傳」に仰いで、ハンザーラー以下又ルッディーン・ジヤーミーに至る百に近き作家を拉し來つて內外兩面より其作風と其作とを縱橫に論評してゐる。

本書全體の結構布置は概れ以上の如くである。素より此れは著者が將來研究してゆく準備であるに過ぎない。併し波斯史及び波斯語等に無明の私は、其の內容に就て云爲するの資格を缺いてゐるから單に內容の紹介だけに止めて置くのであるが、行文暢達でよどみなく記されてあるのは特によろこばしく感じた。私も前後數時間を連續して聊かも休まず一氣呵成に讀んだ。それ程本書の性質にも似ず平明に直截に筆が運ばれてゐる。說いて悉さず論じて諧らずとの思ひは一部から受けないとも限らないが、東西の學界に今尙ほ疑問の點多しとされてゐる事柄を簡潔にまとめてゐることは著者の勞を多としなければならぬ。少くとも『我國に於けるペルシヤ研究を盛ならしめんことを願ふ』(自序)著者の啓蒙の目的は既に達せられてゐるといつてよい。而して啓蒙といふ方面に於て特に私は本書を推薦する。敢てペルシヤのみと言はず、西アジア方面に對する研究が日本に於て盛になられねばならぬことは、私も宿年の願望であるから、私は此の著の現はれたことを衷心から喜んでゐる。著者荒木氏が目下啓明會の補助を受けてペルシヤ研究に忙殺されてゐることは世間周知の事であらう、私は一日も早く其の成功を遂げられて學界に貢獻せられんことを求めて止まない。(飯田忠純)